

特別講演

主催 埼玉医科大学附属病院感染症科・感染制御科 ・ 後援 埼玉医科大学卒後教育委員会
平成14年10月11日 於 埼玉医科大学第四講堂

わが国における性感染症の現状

山崎 勉

(埼玉医科大学感染症科・感染制御科)

性感染症(sexually transmitted diseases)は、梅毒、淋病、そけいリンパ肉芽腫、軟性下疳などの性病と称されてきた疾病に加えて、性器クラミジア感染症、性器ヘルペスウイルス感染症、尖形コンジローム、B型肝炎ウイルス感染症、サイトメガロウイルス感染症、膣トリコモナス感染症、HIV感染症など性行為により伝播する多くの感染症を含む。わが国においては、ここ数年来、上記の性感染症の多くが増加傾向にある。特に、性器クラミジア感染症、性器ヘルペスウイルス感染症、尖形コンジロームなどでは、増加が著しい。これらの背景には、初性交年齢の低年齢化、コンドーム使用の不徹底、低容量ピルの認可(平成11年)などが考えられている。最も罹患率の高い性器クラミジア感染症では、女性は無症状で感染に気付かないことが

多い。通常の妊婦検診においても5-7%程度の妊婦がクラミジアに感染している。また、性感染症の増加は、これらの微生物が母子感染により、小児に伝播される可能性を示唆する。性感染症の原因微生物が小児に感染した場合は、単なる局所感染ではなく全身感染を呈することが多く、重篤であったり後遺症を残したりすることが多い。

国際交流の増加に伴い、性感染症もグローバル化している。海外で流行している性感染症についても、今後留意する必要がある。性感染症の増加に鑑み、若年層への性感染症の啓蒙、適切なバリアープロテクション(正しいコンドームの使用方法)の教育などが重要である。